

新  
歌人群像

# 古泉千櫨

早熟にして天才歌人

秋葉四郎



## 少年千櫨

みんなみの嶺岡山の焼くる火のこよひも  
赤く見えにけるかも

明治三十七（一九〇四）年、千櫨<sup>ちかし</sup>満十八歳の歌である。生前唯一の自選歌集『川のほとり』（大正十四年五月刊）の巻頭を飾っている。少年の作とは思えない万葉調の堂々とした風格をもつ一首であり、千櫨の早熟と天才を思わせてやまない。

この歌が歌集として人目に触れたのはずっと後年だから、「歌集刊行時の千櫨の力備の加わっていることも疑われる」（上田<sup>みよこ</sup>三四二）『古泉千櫨の秀歌』と見られがちでもある。しかしその足跡を徹底してたどってみるとそうではないことが明らかである。千櫨はこの歳には完全に『万葉集』を咀嚼<sup>そしやく</sup>していたのである。

嶺岡山系を前にした、千葉県吉尾村細野（現鴨川市）の農家の長男に生まれた千櫨（本名幾太郎）は、年々この山焼きを見つづけている。その山焼きに改めて向かった時、少年にして『万葉集』が心にあつた千櫨は、ごく自然にこの万葉調の歌が出来たのである。



「みんなみ」「けるかも」などという用語も、また一首の主調たるおおらかな声調も、早熟でもあった千櫨にとって、ごく当たり前の詠嘆であった。

これを裏付ける根拠は他にもある。この年（千櫨十八歳）に、伊藤左千夫の「馬酔木」に「古泉沽哉」の筆名によって歌の投稿を始め、左千夫の高い評価を得ていることである。後に、この「馬酔木」の千櫨の歌（耕余漫吟）について土屋文明が「既に一家の風格が見られるように思う」（岩波文庫『古泉千櫨歌集』解説）とまで言っている程だから、少年千櫨がどんなに早熟でしかも天才であったかが分かるのである。

千櫨は、十一歳で父から四書の素読を受け、近くの漢学塾にも通い、十三、四歳には雑誌「小国民」「心の花」あるいは「萬朝報」歌壇などにさかんに投稿している。この年「萬朝報」の選者海上胤平（万葉調論者）の『十大家集』を全部筆写したともいう。

十五歳で高等小学校を卒業すると、母校の代用教員に採用され、やがて教員養成所を出て準指導の資格で小学校教育に携わった。この年あたりから『万葉代匠記』『万葉集古義』を讀破し、実作上に生かせるまでになっていた。十五歳の時の投稿歌に「夕されば庭の木

立に鳴きし蟬向うの丘にうつりてぞ鳴く」が残っているのも少年千櫨の作歌力をしのばせる。後年「アララギ」の中核を担う才覚は少年にしてすでに身につけていたのである。

### 出郷そして「アララギ」の編集

稚わか葉にほひ光れりかにかくに吾れ故郷を去るべかりけり

君が目を見まくすべなみ五月野の光のなかにたちなげくかも

小学校準指導として働きつつ、千櫨の作歌活動はいよいよ盛んになる。明治四十（一九〇七）年二十一歳のとき、休暇を利用して上京、「馬酔木」終刊期の伊藤左千夫にまみえ、三日三晩歌を語ったりもしている。ここで根岸派の主な歌人たちとも出会った。

翌四十一年、二十二歳の四月に突然職を辞し、五月には左千夫を頼って上京、本格的な歌人としての出発をした。急な出郷には、当時としては周囲の理解の得難い年上の女性（後に結婚）との恋愛もかわわっている。この恋愛にも千櫨の早熟と天才、あるいは人に威圧を与えない人柄のよさが関係していたのかもしれない。その年十一月に「帝国水難救

済会」に職を得、千櫨の短歌を主とする生活が始まり、五歳年上の斎藤茂吉とも昵懇の間柄となった。この明治四十一年はまた、正岡子規没後七年に当たり、九月に上総の蔵眞の手により「阿羅々木」が刊行された年である。様々な経緯があつてやがて「阿羅々木」は蔵眞の手を離れ東京の左千夫の下に移管、明治四十二年に新生「アララギ」が誕生した。初期の「アララギ」は、千櫨、茂吉、島木赤彦が左千夫を補佐し進められている。その中でも特に千櫨は左千夫の信頼が厚く大きな貢献をしたのである。



師・左千夫（前列左より4人目）を囲んで。後列左より茂吉、1人おいて千櫨、右端は文明、前列左から2人目は蔵眞。（1911年頃）



「アララギ」に入会して来た原阿佐緒と。

大正二（一九一三）年、左千夫が没すると自然と千櫨が編集の中心となって「アララギ」は進展する。しかし千櫨は、「アララギ」を遅刊させ、編集者としては評判がよくない。茂吉に言わせれば「千櫨は万事丁寧でゆくところまで行かねば承知せず、満足の行くまで骨折るといふ流儀」で、「アララギの選歌も約束までには出来ず、会員や同人をてこずらした」（茂吉全集「古泉千櫨」）となり、やがて「アララギ」の編集は茂吉、さらには赤彦に代わってその辣腕が振られたのである。

千櫨の事務処理、編集能力のことは今では判るすべもない。気分任せに「馬酔木」の編集をした師左千夫の影響も少なくないであろう。その上で、私は千櫨がもともと文芸作品の濫作を忌む傾向にあったことも忘れてはなるまいと思っている。千櫨の天才肌の気質はこういうところにも現れていたのである。千櫨日記に早々と届いた新年号の雑誌を見て濫作を激しく批判しているところを見るにつけ、私にはそう思える。「どれを見ても大抵作者は同一だ、よくこんなに書けるものだと感心する、今年の新年に某といふ人は十五誌に書いたさうな、娼妓がまはしを取る様なものだ、娼妓たる作者も気の毒である、お客である読者は一層気の毒である」。「ああ娼妓的文学、仕立て屋的文学」（玉田登久松「古泉千櫨探索」）。

### 千櫨の斬新

千櫨は「アララギ」の中にあつて独自の歌風を持っていた。子規、左千夫を越え、まさに一家の風格を持っていたと言つてよい。

例えば用語。根岸派の歌人たちが擬古的な傾向に甘んじている中にあつて、千櫨は生新斬新なものに意欲的に挑んでいる。

日盛りの街樹のかはをかじり居る馬の  
歯白くあらはに光る  
（大正五年）

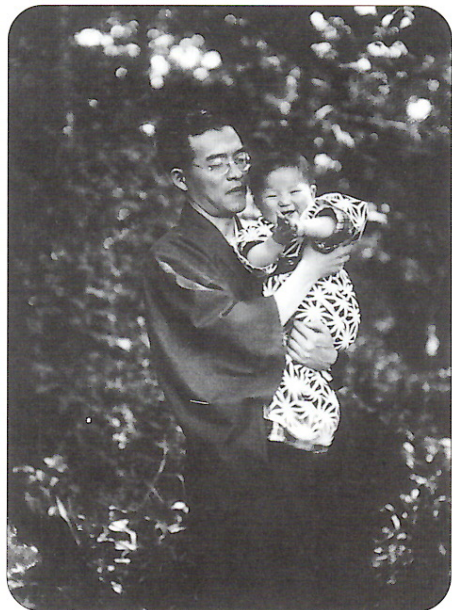
まなかひに大き株虹立てりけり夕おほ  
ほしき雨雲のうへ  
（大正八年）

ここに「街樹」という言葉があり、「株虹」という言葉があつて、この二首の世界が読者の心に迫ってくる。街には「街路樹」だけがあるのではない。街路樹をも含めて「街樹」が多く在つて人々と生活を共にしている。だからこの語によって、街の景観も人の暮らしも思わせもする。また「株虹」（原作のまま）は『日本国語大辞典』（小学館）によれば「かみじり燕虹」で「頂部が雲にかくれ、足の部分だけが雲間から地上におりている虹」のことである。こういう特殊な経験に遭遇した時、機敏に一首の添景とすることは近代短歌の重要なポイントであり、千櫨は先駆者であつた。

また例えば、短歌に盛り込む「詩」をごく身近に、日常性に置いたことも、あるいは千櫨一人の創意ではないかもしれないが、この時代の千櫨が意図的に推し進め、拡張した歌風のひとつである。

赤き火をおこすといへばわが娘うちよ  
ろこびて火を吹くものを  
（大正七年）





三女の玲子を抱く千櫨。(1921年)

山のうへに入日あかあかとかがやけり  
今日の日ながく思ほゆるかも

(大正十三年)

きさらぎのひるの日ざしのしづかにて  
梅檀の実は黄に照りにけり(大正十四年)

喜んで「火を吹く娘」の生写、「今日の日  
ながく思ほゆる」という感覚、「梅檀の実が  
黄に照る」という写象、これらは一見瑣事だ  
が、よくよく考えてみれば作者を中心とし  
た生の現実というものである。こんなに身近に、  
日常のなかに生者の心を捉える「詩」はかが  
やき、響いているのである。この何でもな  
いところに「詩」を発見する詠風はその後に  
多くの影響を与えている。

## 晩年の自在と円熟

千櫨は「アララギ」にあつて交流の広い歌  
人でもあつた。左千夫に連れられて若くして  
森鷗外の「観潮楼歌会」に出席し、多くの歌  
人たちと会い、「心の花」にも投稿していた  
から佐佐木信綱をも何度か訪ねている。北原  
白秋、若山牧水らとも親交があつた。だから  
大正十三(一九二四)年、北原白秋らとの  
「日光」の創刊に、釈道空と共に「アララギ」  
を去つてかわつていく。同時に、この年に  
は喀血し、肺結核と診断され静養を余儀なく  
された。尊敬して集まる門人も増えてくる中  
で、千櫨は晩年を迎えたのである。

晩年の千櫨の作歌は、端的に言えば澹刺と  
した抒情性を示し、先ず歌が自在であり、結  
果として円熟を思わせてやまない。

すこやかに心ゆらぐも風のなか日のな  
かにしてひとり歩めば  
草原をあゆみきたりて夕ふかし大き馬  
二つみちに立ち居り  
なき人のふかき命をおもふ時われはわ  
が身を愛しまざらめや

忘れぬあはれさならむここにしておか  
すかに塩を含む空気を

柿わか葉目にかがやけり三人の娘なら  
びて向うを行くも

たづね来む人たれならむわが室に深く  
さしたる冬の日のかけ

論理をこえ歌が沁み透ってくる。例えば最  
後の歌、いよいよ重篤となつて臥す部屋に冬  
の光が深く差す。限らない孤独のなかで訪い  
来る人を思っているのである。千櫨の詩人質  
には豊かな可能性があつた。

昭和二(一九二七)年八月、最期の夜、医  
師でもある斎藤茂吉が千櫨を見舞っている。  
一同を階下にやり、残った茂吉に千櫨は「二  
十年間よく厄介をかけたが、このうへともあ  
との事は宜しくたのむ」と言う。茂吉は立ち  
上がりながら「ぢや古泉、明日の朝会ほう、  
それにしても少しおちつかにあいかん」と言  
う。千櫨は茂吉のほうへ顔を向けながら「落  
ちつくよ、だが明日まではもつまい」寂しく  
笑つて「ありがたう」とはつきり言つたとい  
う。その夜千櫨は満四十一歳の生涯を閉じた。  
早熟天才歌人千櫨らしい最期である。